
星空と銃弾と紅い夜

斗詩わたる

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

星空と銃弾と紅い夜

【コード】

N8383C

【作者名】

斗詩わたる

【あらすじ】

世界を股にかける女盗賊トリックスター。今回の彼女の恋人は、英国女王の秘蔵の宝石“プリンセス・ルビー・オブ・ザ・スター”そして秘宝を警備する英雄ヴィルヘルム。果たして、彼女はそのルビーを盗むことができるのか!?

前編 く曇天の挨拶く（前書き）

初めまして、皆さん。今回が私の初投稿作品となります。

まだまだ未熟者ですが、よろしく願います。

また、描写に過激なものがあるため、気分が悪くなりましたら申し訳ないです。

それでは、皆さんが楽しんでいただけることを願いつつ……よろしく願います！

前編 く曇天の挨拶く

くプロローグく

自分で言うのもなんだけど、私は世界で一番の盗賊だ。

どんなものでも華麗に大胆に、そして完璧に盗んであげる。

繊細に試行錯誤する計画を立てて、世界が驚くミステリアスな演出を欠かさない。

私は計画を練るたびに、まだ見ぬ宝物に恋をする。

そのワクワクドキドキと言ったら、もう寝ても立ってもいられない。

だから、今日も鮮やかに盗んであげる。

ーはずだったのに。

事前に築き上げた計画は見事に木っ端微塵。

ぐうの音も出ないほど、私はあっさりと敗北した。

完膚なきまでに叩きのめされて。

立ち上がることもできない四面楚歌。

間違いなく絶体絶命。

なのに、私は逃げることも忘れて、ソレを見上げている。

それは、星降る夜の静かな運命。

赤い瞳をした、孤高の魔人との、初めての出逢いだった。

くプロローグ 終く

クリスティーヌ・ルパン。

それが、全世界に国際指名手配されている私の名前。

これでも一応、か弱い女の子。

職業は盗賊。

もちろん逃げも隠れもするけど、人殺しは滅多にしない。だから安心してね。どこかで会っても記憶と心だけ盗んであげるから。

「　　って言う割には、ロクな男に会わないんだけどね」

狭い路地の中、前後を取り囲む男たちを前に、私は小さく溜め息をつく。

みんなが力自慢なのか、服の下からでも鍛えられた筋肉が見て取れた。

「ねえ、お嬢さん。俺たちと一緒にデートしない？」

「こんなにも美しい女性を一人きりにさせたら、英国紳士として恥ずかしいからね」

「そうそう、君の魅力は太陽にも勝るほどだよ」

「曇り空には、部屋でハイティーとしようじゃないか」

体格の良い、黙っていればそれなりにイイ男たちなのに、女の口説き方というものがまるでわかってない。

「　　そう。黙っていれば、それなりにカッコイイのに。」

「うん？　こんなイイ男に囲まれて緊張してるのかい？」

背後にいた男が、逃げられないように私の肩を抱く。

「　　黙っていれば……。」

「レディは緊張しているみたいだ。なら、私がエスコートしますよ」

身体を舐め回すような視線を隠すことなく、もう一人の男が近付

いてくる。

――黙って……。

「ああ、もう！ おとなしくこっちに来い！」

しびれを切らした前方の男が、強引に腕を掴む。

――黙……。

「どうせお前は逃げられないんだ。ただ黙っておとなしく俺たちに付いてくればいいんだよ！」

もう待ち切れないのか、前方にいるもう一人の男はいやらしい笑みを浮かべている。

――そこまで言うなら、黙らせてあげようじゃないの。

「いいわ、あなたたちに付き合っただけあげる」

私が観念したと勘違いしたバカたちは、一斉に喜びの声を上げた。けど残念。

「さあ、それじゃあ一緒に楽しみましょう」

まあ、私の男運のなさは今に始まったことじゃない。面倒だけど、身の程というものを教えてあげないかね。

過去にこいつらに泣かされた、名前も知らない女の子たちのためにも。

クスリ、と小さな微笑みを最後に。

「――狂おしい死の遊戯を」
デス・ゲーム

薔薇の如き真紅を身に纏う、破滅の嵐が現れた。それは、破壊だけを撒き散らす暴力の化身。

狭い路地の壁を乱反射するように縦横無尽に飛び回る、美しい神速の悪魔。

哀れにも犠牲となった男たちは悲鳴を上げる暇さえ与えられず。およそ人が死を免れるギリギリの人体破壊を無抵抗に味わうしかなかった。

その宴はわずかに数秒。

しかし、蠢く重傷の男たちにとっては、薔薇のように美しい女性が再び現れるまでの長い悪夢であった。

目にも写らぬ攻撃になす術もなく、女性を食い物にした彼らの所業は予定外の悪魔の前に沈黙したのである。

「ふう、スツキリした」

いや、やっぱり身体を動かすのって気持ちイイよね。うん。

改めて見ると、男たちの傷は深刻だった。きつと、初日の出は病院で見るね。少しばかりやりすぎたかな、こりゃ？

まあ、でも。

「女の子を食い物にした罰だったの。ちゃんと反省しなさいよ」

たぶん聞こえちゃいないだろーけど。こういう奴等はキチンと言っておかないと、つけあがるものだし。

「　　ったく。こいつらのせいで無駄な時間を過ごしたわ」

テンションは一気にブルー。こういう時は、やっぱり今が旬の“彼”に会いに行くのが一番。今の私は、もう“彼”に釘付けなのだ。

「うっ……すっごくドキドキする」

心臓が今にも胸から突き出そうなくらいに高鳴る鼓動。ただ“彼”のことを想うだけでソワソワしてくる。

もう完全に一目惚れ。恋する乙女は“彼”に会うだけでも一苦勞なのです。

「ちゃんとオシャレなドレスも用意したし。門限までに早く行かないと、会えなくなっちゃう」

はやる気持ちを抑えながらも、足取りは自然と早くなる。

門限の厳しい“彼”に遅れないように、私は待ち合わせ場所へと向かったのだった。「もう、完っ璧」

待ち焦がれた恋人との初対面。私は“彼”が放つその魅力に、うっとりで見惚れていた。

情熱的とも神秘的とも言える鮮やかな輝きは紅。その体は白銀のダイヤモンドに次ぐ硬度を持ち、その美しさに世界中の歴史の中でロマンスを呼び覚ましている。

「今、私もロマンスを体験してるのね……」

ただ何よりも目を引くのは、絹糸状の結晶構造だろう。カボツシヨン・カット（上半分をドーム状にカットする技法）により、六条の光線が中央で交差して、見る者を惹きつける星を形成する。

ゆえにその名を“プリンセス・ルビー・オブ・ザ・スター”

英国王室全面協力によって展示された、一日一時間限定の大イベ

ント。

500カラットを超える大きさに値段などつけようもないが、噂を聞きつけた貴族たちだけの祝福された三日間である。

「いや〜。これはもう私のモノとなるべくして生まれたのよ!」

そう。このルビーが、今回の私の恋人^{タイゲット}。赤を好む私にとっては絶対に手放せない、至高の誕生石なのだ。

だけど、こんなにも魅力な“彼”なので、恋敵はやっぱり多かったです。だったら、盗られる前に盗ってやれ、ってなわけですぜ旦那。

「しっかし、これはまた嚴重に警戒したもんねえ……女王の護衛と同レベルじゃない」

18世紀初頭の初代グレートブリテン女王“アン” 彼女は子宝に恵まれず、それゆえに宝石の持つ魔力に神秘を願うようになる。このルビーもまた彼女の子宝を願う形で捧げられ、人々の幸せを祝う意味を込めて今回の展示に踏み切ったという。でもまあ、ぶっちゃけそんなこと知ったこっちゃないけどね。

「女王には悪いけど、この宝石は」

「この宝石がいかげなされましたか、お美しいお嬢さま」

滑らかに耳に響く若い男性の声。悟られることなく近付いた謎の気配に、私は素早く振り向いた。

「ああ、これは申し訳ありません。驚かせるつもりはなかったのですが、あなたがそちらの宝石を熱心にご覧になっておりましたので、その横顔に声をかけずにはいられませんでした」

「あ、いえ……こちらこそ、すみません」

背後にいたのは、淡い金の髪が印象的な青年だった。

まさしく貴族的と呼ぶに相応しい、端正な顔立ちである。切れ長の目も、高く細い鼻筋も、余分な肉がほとんど付いていない。けれど、引き締まった肉体は鍛え抜かれた熟練の兵士を思わせた。

ひとたび微笑んで見せたなら、女性の誰もがその記憶に永遠に刻み込むだろう。あるいは、その魅力の虜となって仕事が手につかぬこともありうるのではないか。それほどまでに、目の前に現れた青年の容貌は美しかった。「　　ヴィルヘルム・エーゼルヴァイン……」

スペイン継承戦争の際、女王アンの勅命により、イングランド軍総司令官マールバラ伯爵の配下として参戦。ネーデルランド戦線やブレンハイムの戦いでの大戦果、そしてジブラルタルの陥落など、多大な功績を英国にもたらした大英雄。

もはやその名は知らぬ者がいないほどで、老若男女を問わず多くの国民が彼を信奉し、エーゼルヴァイン家の地位を確固たるものにした人物である。

ヴィルヘルムは微笑みを讃えたまま、丁寧に略礼した。

「これはこれは……私ごとき者の名をご存じでいらっしやられたとは、大変光栄に存じます」

「あら、今の英国にあなたの名前を知らない人なんているのかしら？　英雄さん」

「これはまた手厳しい。名が売れるというのも、恥ずかしいものですね」

人懐っこい照れ隠し。だけど、私はこれっぽっちも彼を信用していません。

英雄ヴィルヘルムがいるということは、この博物館の警備責任者は当然、彼だろう。

英雄が相手なら、私もテンションがハイになるというもの。だけど、今しばらくは彼を観察しなくちゃ。

「私のことはヴィルとお呼びください」

「あら、ごめんなさい。私はまだ名乗ってなかったわね。私は」

「いえ、お名前をいただくのはこれ以上ない贅沢というものでしょう」

「それはまた、どうしてかしら？」

「ここで会えたのも奇跡なのです。これ以上お引き止めしては、あなたのファンに恨まれるでしょうから」

この言葉をぜひと、あのバカ男たちに聞かせてやりたい。

「もしよろしければ、御迎えの車を御用意いたしますが」

「せっかくの申し出は嬉しいのですが、私は忙しい身で……」

「そうですね。ぜひ、お話をお伺いしたいと思っていたのですが……」

……

「ヴィルさんこそ、警備でお忙しいではありませんか？」

「盗賊は深夜が多いものです。昨夜も、闇に紛れて侵入した賊を三名ほど」

「まあ、それは恐ろしい」

「ご安心ください。私がいる限り、皆さんの安全は保証いたします。ですが」

真摯に、強い意志の光を瞳にたたえて、ヴィルヘルムは告げる。

「女王陛下を悩ませる賊は、その限りではありませんが、ね」

私たちの瞳が交わされる。言葉以上に明確な意志を相手に伝えた

それはまさしく、プロがプロに対する名乗り合いだった。

挨拶をしても握手はしない。利き腕を相手に預けないプロ同士だからこそその宣戦布告。

程よい緊張感が全身を駆け巡る。相手にとって不足はない、と私の本能が告げていた。

のだが、沈黙の冷戦は意外な珍入者の登場によって幕を下ろす。

「ヴィルヘルムどのー！！」

「げっ！？」

私は思わず下品な声を上げる。ヴィルヘルムと同時に振り返るとそこにはやっぱりあのストーカー野郎が手を振りながら走ってきていた。

「探しましたぞ、ヴィルヘルムどの。早く警備に戻っていたただかなくでは、あの“トリックスター”めが何時に現れるかわかりませんぞ！」

ちなみに“トリックスター”とは、私が予告状に記す、もう一つの名前である。

「ああ、それはすみません。名残惜しいですが、私はここで失礼致します」「いえ、お気になさらずに。また会える時を楽しみにしますわ」

ヴィルヘルムはわずかに口許に笑みを浮かべ、織田と一緒に立ち去っていった。

「　　っていつか、なあってアイツまでいるわけ!？」

おただかつ
織田忠勝　東洋の異国、日本で彼が担当していた国宝を私が盗んで以来、ずくずくと追いかけて来る変人。

その名前の通り、私に勝つまで追いかけるつもりなのかあの男は。

「　　でも、面白い」

一週間前に出した予告状通り、今夜こそがパーティーの本番。計画はすでに万全。

ここからが華麗に恋人を盗み抜く大胆なプロの真骨頂。
腕がなる大舞台に文句なんてありえない。栄えある共演者に不満なんてありえない。

宴の時は近い。

中編 く 歓迎の星空く (前書き)

トリックスターがいかにして盗むのか、皆さんも考えてみてください。
い。

中編 く歓迎の星空

ヴィルヘルム・エーゼルヴァインは魔術士である。しかし、その事実を知る者は英国内でもほとんどいない。

そもそも、魔術士自体が世界に認められていない“異端者”である。

魔術の歴史は古い。古代においては“シャーマン”による祈祷が一般的であったし、神話にまで遡れば聖剣魔剣の伝説が今もなお語り継がれている。

ならば、なぜ魔術士の存在が公にされていないのか。

中世ヨーロッパにおいて行われた“魔女狩り”をご存じだろうか。これは12世紀、スイスとクロアチアで行われた民衆法廷が起源だと言われている。この頃はまだ異端の追及はあっても裁判はなかったが、15世紀に入るとカトリック教会が異端者審問を通して“魔女狩り”にかかわりを持つようになったのだった。

魔女狩りには、二つの意味がある。

一つは、人々の平和を脅かす魔術士たちを抹殺すること。

そしてもう一つは、人々に力を貸す魔術士たちを探すことである。魔術とは読んで字の如く“魔力を操る術”である。

術者は自身の活力エネルギーを魔力に変換し、世界に働きかけることで神秘を操る。

戦場を薙ぎ払う炎や、天空より轟く雷など 時の権力者が恐れるのも無理からぬ神秘の数々は、しかし魔術士からすれば、正しい条件を満たしたうえで導き出した結果にすぎない。

魔力を喻えるなら、世界に支払う専用通貨である。

術者は日々の活力を魔力に変換し、それを世界に支払うことで“一度限りの神秘”を買い、使用する。

長期間に渡る魔術もしくり、代価となる魔力を支払い続けること

でその効果を続行させることができるのだ。

そこには当然、落とし穴もある。

魔力とは、即ち術者の活力エネルギーである。ゆえに魔力が尽きるということは、自身の活力がなくなつたということ。活力を失つた人間は植物状態となり、最悪の場合はその生涯を目覚めることなく寝て過ごすことになる。

つまり魔術の行使とは、魔術士にとつても破滅の代償を覚悟したうえでその神秘であつた。しかし、すでに世界では“科学”が広まりつつあるため、魔術士たちは世間に隠れながら研鑽を積みなければならなかつたのだ。

エーゼルヴァイン家も、元は魔術一族だつた。しかし“魔女狩り”の弾圧により、その神秘を国に捧げる盟約を交わすことで滅びを免れたのである。

そのエーゼルヴァイン家の歴史の中で奇跡が生まれた。ヴィルヘルム・エーゼルヴァイン 先の大戦において祖国に大勝利をもたらした英雄は、その活躍によって女王の信を得、ある“聖剣”を託される。

武術、魔術その両方に優れた才能を発揮した彼は、まさしく一族の至宝だつた。これより後の21世紀において、エーゼルヴァイン家に最高の素質と人格を備えた双子が誕生するのだが、その時代において“聖剣”は彼らの手元にあつたのだから。

澄んだ夜風だつた。

街の喧騒は昼間とはうってかわつて、静かな空気を取り戻しつつある。

時刻は午後九時 世界中のトップニュースを飾る女盗賊“トリックスター”が出した予告の日。

ヴィルヘルムは博物館の庭で夜空を見上げていた。

「道化は、いつ頃に現れると思いますか？」

「ヴィルヘルムの隣には、東洋の僧らしき男がいた。歳は40半ばといったところか。夜の闇に倣うように輝く黒の瞳が印象的である。眉間にシワを寄せ、その表情はいささか曇っていた。」

「あやつは噂をすれば現れます。女狐ですからな、油断なされるな」
その被害者である彼が言えば、実に説得力のある言葉である。

織田がこうして博物館の警護にあたっているのは、ひとえにヴィルヘルムの招待があったからだ。

織田の持つ“トリックスター”の豊富な情報量　ヴィルヘルムの着眼点はそこにあった。その執念により世界各地に現れる“トリックスター”を追いかけたがゆえに手に入れた情報こそが、ヴィルヘルムの目的なのである。

その見返りとして、織田の博物館警備を容認したのは言うまでもない。

織田から手に入れた情報は、実に興味深いものばかりだった。

彼女の名が最初に世に出たのは紀元前11世紀。中国において、呂尚　一般的には太公望として知られている　が文王と出会った際に使用していた“釣竿”を盗んだことから始まる。

彼女は世界を股にかけ、時には戦場で暴れ、時には城に忍び込んで宝を盗んでいく。

その神出鬼没な行動と盗賊行為により、いつしか誰からもなく“怪盗トリックスター”と呼ばれるようになったという。

もちろん、にわかには信じ難い話である。紀元前11世紀から現在の18世紀まで、実に2000年以上もの時が流れている。いかに魔術士とはいえ、2000年もの時代を生き続けることなどできないのだ。

それゆえに、ヴィルヘルムは考えた。

“トリックスター”とは、彼女の一族が一子相伝で受け継ぐ称号ではないかと。これならば、時代を超える不死性にも説明がつく。

だが、そんなことは些末事だ。問題は彼女の正体ではなく、女王陛下のルビーを守れるか否かである。

ルビーを展示する博物館は前庭を設け、城がすっぽりと収まるほどに広大な敷地のうえに建っていた。

予想される入館ルートは正門と裏門、館の窓約100ヶ所。地下からは床を鉄で補強しており、一日二日で細工できる硬度ではなく、上空からも備えて屋上に20人の警備兵を常に配置している。

博物館の内外においても各要点に警備兵を配置。総勢300名の警備兵を指揮する英雄ヴィルヘルムに守られた、サミットレベルの警戒網であった。

「しかし、星が綺麗ですね。彼女も、この夜空を見ているのでしょうか？」

「あやつが見ておるのは、別の“星”でしょう。それを我が国の諺では“花より団子”と言っているのです」

「花より団子、ですか？」

「そうです。浅ましい女盗賊には相応しい諺ですよ」

そう言って織田は高らかに笑う。彼女には聞かせられない言葉だな、とヴィルヘルムは思った。

「“トリックスター”か」

今に思い返してみても、昼間に会った彼女はまさしくルビーのように輝いていた。

背に滝の如く流れ落ちる髪は淡い紅。艶やかに鮮やかに、極上の絹糸を思わせる髪が真っ直ぐに伸びていた。

ドレスから露出した肌は冴え冴えとした汚れを知らぬ純白である。この月下にあれば新雪のようにさらに輝きを増すに違いなかった。長く反った睫毛の下には、幼子のあどけなさを残した大きな目。瞳は南国の海を切り取った薄青で、時折そこに浮かぶ光が吸い込まれるように輝いていた。

十分な広がりを持つ唇は桃のように瑞々しいオアシス。まさかとは思ったが、彼女に施された化粧は確かにこれだけであった。

輪郭は卵のようにならからで、高く細い鼻梁が影を映え落とす。目の当たりにした誰もが息を呑む、手を加える余地すらない真正の美貌。陽のある朝にも月のある夜にも咲き誇る、決して枯れることのない花であった。

枯れぬ、とはもはや喩えではない。

2000年も前から地上に咲く彼女は、世界中にその美貌を携えて盗賊行為を働いてきた。その存在自体が神秘的とも言えるなら、想像もできぬ不死性も疑問に湧くことはない。

衰えぬ容貌、枯れぬ肢体　いつまでも十代の乙女であることを運命付けられたが如く、彼女はすべてのすべてが美しかった。「はっ。何を考えている、ヴィルヘルム・エーゼルヴァイン。彼女は敵だぞ」

脳裏に浮かぶモヤを振り払うように、ヴィルヘルムはかぶりを振る。織田は訝しげにしていたが、さして疑問を口にすることはなかった。

「それで、警備のほうはいかがですか？」

織田は警備兵の一人として参加しているが、立場はヴィルヘルムからも独立した人物である。この男は指示されるよりも、野性的な直感力と執念による単独行動が優れているとのヴィルヘルムの判断だった。

その織田が改めてヴィルヘルムの組み立てた警戒網を聞く。この意味を、ヴィルヘルムは正しく理解した。

「彼女を歓迎する準備は整っています。300名に及ぶ警備兵を常時シフトし、不測の事態にはさらに100名の増員を予定しています」

「床に強化鉄板、屋上に20名の警備兵、前庭に60名、館一階に70名、二階に60名、三階に50名、残りはシフト　ですね」

しかも、その300名には拳銃が備えられている。小さな国なら、この戦力だけで制圧できるほどだ。

しかし織田の表情は険しいまま。つまり、彼の本能が危険を警戒し、畏怖を拭えていないことを意味する。

「安心してください。何人たりとも、女王陛下のルビーに近づくことは叶いませんから」

その理由には、ふたつあった。

一つは、ルビーが、強化鉄板に固められた地下室に保管され、その扉の鍵はヴィルヘルムによる契錠魔術が使われていること。

そしてもう一つ、地下室に続く階段に至るまでに広がる吹き抜けのロビーには、ヴィルヘルムが張り巡らせた魔術結界が施されていることである。

結界とは、言わば防犯システムである。外敵から身を守るため、土地あるいは建物に施す罫　決定的な違いは、その効果が極悪化した威力を誇ることである。

ヴィルヘルムがロビーに張り巡らせた結界はまさしく、外敵を追い返すよりも抹殺を目的とした罫であった。侵入した賊がロビーに踏み込んだ場合、その知らせを直ちにヴィルヘルムに伝えると同時に作動する殺傷魔術は、瞬時に塵と化す攻撃力を秘めている。

仮に相手がこの罠に耐え、地下室の扉に辿り着いたとしても、ヴィルヘルムでない限り解錠できない魔術が施されている。

簡単に言えば、ヴィルヘルムのみぞ知るパスワードである。

つまり、どんなに賊が足掻こうともルビーを手にすることなく、ヴィルヘルムと対面しなければならぬ。それは即ち、逃げられぬ破滅を、手をこまねきながら迎えなければならぬことを意味していた。「さあ“トリックスター” 君は、この歓迎会にどんなパフォーマンスを見せてくれるつもりだ？」

この警戒網を計画したヴィルヘルムだからこそわかる。自分が盗賊となつて思案したからこそわかる。

この状況下での盗みは絶対に不可能。仮に自分が同じ設定で侵入したシュミレートを行ったが、何度やっても結果は死であつた。

「捕まえましょう、ヴィルヘルムどの。あやつを」

「ええ。あなたが提供してくれた情報は、無駄にはしません」

曰く、誰も彼女の姿を見たことがない。
いかなる変装術を用いているのか、彼女は誰にもその姿を見せず
に宝を盗んでいくという。

警備者は彼女に襲われた時と盗まれた後にだけ、その存在を痛感させられる。今だに目撃例のない怪盗 “トリックスター” の異名は伊達ではないのだと、ヴィルヘルムは改めて思う。

「だからこそその歓迎会だ。彼女はいかにして破るつもりなのか」

夜は静寂のまま、嵐の前の静けさのように静まり返っている。

二人の前に歩いてきた黒の子猫が愛らしい鳴き声をあげて、ヴィルヘルムらを見上げていた。

「おつおつ。こんなトコロには危ないぞ」

織田の意外な一面である。いや、元々が僧である彼にしてみれば、動物愛は何ら不思議ではなかった。

「可愛い子猫ですね」

「このつぶらな瞳がたまりませんなあ……毛並みも柔らかく、温かくてイイ気持ちですぞ」

我が子のように抱き締める織田の表情は、いくぶん和らいでいた。動物とは不思議な生き物である。

もっとも、抱き締められている子猫のほうは、ニャーニャーと叫びながらジタバタと暴れているが、それはご愛嬌である。

「いつまでもこうしていたいが、すまぬなあ……我らは仕事があつてな。お主に割いてやる時間もない」

寂しそうな表情だった。織田から滑るように離れた子猫は、そのまま走り去って闇に消えていった。

「では、私は戻ります。織田さんは、どうなさいますか？」

「私はこの前庭におりましょう。もしやすると、あやつはここから侵入するやもしれませぬからな」

「わかりました。何かあれば、お知らせください」

「うむ。あやつの悔し顔が目に浮かびますわ」

二度目の高笑い。だが、その思いはヴィルヘルムとて同じである。

夜空は澄んだ風に包まれ、二人の感情を落ち着かせる。

悩む時間はない。

だが、考える猶予はまだある。

“トリックスター”が予告した期日まであと二時間を切った、静かなる夜。

ヴィルヘルムの魔術神経にかすかな痛みが走ったのは、それからすぐのことであった。

後編 く絶技、繚乱く（前書き）

ここでトリックスターが登場します。皆さんの期待を良い意味で裏切られたなら、嬉しいです。

後編 く絶技、繚乱く

彼女にしてみれば、それは齒がゆいほどに後悔した、人生最初で最後のミスだった。

彼女の侵入方法は、至ってシンプルである。顔を仮面で隠し、漆黒のダークスーツに身を包み、影から影へと移動する。

警備兵の配置、館の見取り図のすべてを記憶し、最も安全かつ最速のルートで目的物を盗むことで快感を得られるのだ。目を欺き、耳を欺いて、誰にも知られることなく鮮やかに盗む。それが、彼女の美学だった。

ダークスーツに施した“呪術” Bクラス中級魔術に位置する“気配遮断”は、まさしく彼女にとって理想的な魔術であった。この魔術があればこそ、今の彼女があると言っても過言ではない。

その彼女が、今や館中から集合しつつある警備兵に銃口を向けられ、万事休すの状況に置かれている。

ロビーに張り巡らされた、蜘蛛の巣の如き魔術結界 その気配に気付かずに一步を踏み出した時点で、彼女は自らの致命的な失敗を悟った。

それは、ロビー全体に施された“火種”であった。触れたとしても蜘蛛糸ほどに感触のない狡猾な罠は、しかし愚かなる侵入者が触れた瞬間に爆発する。

それが千個 ヴィルヘルムがロビーに仕掛けた火種は至る所に点在し、触れた瞬間に連鎖爆発を引き起こす。

一つ一つは小威力だが、それを立て続けに食らえば無事に済むはずがなかった。

一発目は回避した。だが、回避したその瞬間に別の火種が着火する。冷酷に無慈悲に、彼女は曲芸のように滑稽に弄ばれた。

そうして、彼女は騒ぎを聞き付けた警備兵に囲まれる。

ダメージは、もはや回復が追いつかぬ状態にあった。左腕は根こそぎ消滅し、全身が火傷と風傷の満身創痍。吐き気とめまいが平衡感覚を酔わせ、冷静な思考力さえも綻びつつあった。

「あつけない幕引でしたね、美しいお嬢さん」

目の前の男は、憎たらしい言葉を告げる。だが、彼が指示したなら周りの警備兵は一斉にその引き金を引くだろう。

今の彼女の命はまさしく、この金髪の男が握っているのである。

「君には無駄かもしれないけど、いちおう聞いておくよ。武器を捨てて投降してくれ。君はまだ、死ぬには惜しい人材だ」

ヴィルヘルムの申し出に、彼女は無言の拒否で応えた。

彼女とてプロである。自らの美学を曲げてまで生き長らえるつもりはなかった。

「なぜ、女王陛下のルビーを奪うのです?」

愚問である。

盗みたいから盗む。ただそれだけに理由などあるはずもない。

「あくまでも無言ですか。いえ、それがプロというものでしたね。」

それに「

彼女は死を恐れない。ゆえに、彼女の瞳はまだ爛々と輝いたままだ。

「あなたはまだ、諦めていない」

その言葉と、おぞましき異変が起きたのは、ほぼ同時だった。警備兵の“影”から、全身を黒に染める異形が現れたのである。

否。それは“影”の本体である兵士たちの姿そのものだった。背格好も装備も瓜二つ。違うのは、その“影”たちが面も窺い知れぬほどの漆黒であることか。

呪術　Aクラス大型魔術“正と負の狂騒曲”《ドッペルゲンガ―》。

本体である人物と全く同じ性能を持つ“影”を操る秘術。ゆえに攻撃対象は本体の人物のみに限定されるが、こと密集戦においては絶大な効果を発揮する魔術である。

混乱とともに現れる影の軍勢は、その標的を自動的に本体に定め、殺戮を開始する。止めるには、本体が死ぬか、術者を倒さねばならない、非常に強力な神秘であった。

この、見るもおぞましき“影軍団”の出現に、さしもの警備兵たちも混乱を極めていく。

語る舌を持たぬ群れである。宣告もなく発砲する“自分の影”と戦うなど、冗談の悪い悪夢でしかなかった。

ただ一人、この神秘を回避した男以外は　。

「これが、あなたの切り札ですか？」

男の手には、いつのまにか“剣”が握られていた。他の警備兵たちとは違い、銃が常識となりつつある今では時代遅れもはなはだし

い。だが、彼女はその“剣”をこそ警戒した。なぜかは自分でも分からない。しかし、この“剣”は危険だと本能が訴えている。

「女王直属近衛騎士、ヴィルヘルム・エーゼルヴァイン　推して参る！」

高く謳い上げた宣言と同時に、消失したと見紛う瞬発力をもって
ヴィルヘルムは彼我の距離を瞬時に詰める。

その動きには、当然に彼女も対応する。だが、男の速度は繰り出
す剣撃のリズムに乗る形で徐々に早くなっていた。

彼女は反撃すら許されない。片手で操るナイフは十合の打ち合い
をもって木っ端微塵に破壊され、その衝撃を相殺できずに壁に叩き
付けられた。

「これで王手です」
チェック

死力を振り絞り立ち上がった彼女を、喉元に突き付けた剣
が静止する。

この時点で、警備兵たちを襲っていた“影”が消えていく。それ
は即ち、彼女の活力が神秘を維持できぬほどまで消耗させられてい
ることを意味していた。

しかし。

彼女には不可解な疑問があった。警備兵たちに通用していた“呪
術”がヴィルヘルムには通用しなかった、この不可解な事実である。
いかにヴィルヘルムが優れた魔術士とはいえ、Aクラスの神秘を
無力化することなどできない。良くて“影”の出現を遅らせる、あ
るいはその能力をわずかながらに低下させる程度の“対魔力”《レ
ジスト》しかないはずだった。大型魔術は、それほど強力な神秘的
なのである。

にもかかわらず、ヴィルヘルムは完全に無力化してみせた。この
不可解極まりない現象に、彼女は驚きを隠せない。

「なぜ私が君の呪術を無効化できたのか、知りたそうだね」

そんな彼女の心を読んだかのように、ヴィルヘルムは言葉を続け

る。

「もちろん、私の対魔力ではあなたの魔術を無力化できない。その認識は間違いなく正しいのです。」

もう、あなたも気付いているのでしょうか？ この“剣”の正体を。

騎士を夢見た者ならば必ず耳にする、かつての英国を生き抜いた伝説の騎士王の“剣”を「

それは、古の騎士たちを率いた光の象徴。

数多の夢を背負い、幾多の涙で鍛え上げられた、無数の人々が祈り捧げる希望と信仰の結晶剣。

ゆえにその名を“聖剣エクスカリバー”

200年後の21世紀においても、ヨーロッパ最大の伝説“アーサー王”が所持していた伝説の聖剣である。

それに気付いた瞬間、彼女は、ああ…と抵抗の意志を自ら失い。

「この聖剣は妖精の祝福を受けていますね。特に呪術に対しては、完全な対魔力を所持者にもたらすのです」

ヴィルヘルムの言葉と同時に、その息を静かに引き取ったのだ。た。その、あまりにもあっけない終幕に、ヴィルヘルムは言葉を発しようとはしなかった。

彼にしてみれば、確かに彼女は盗賊として優れた技能の持ち主であった。

徹底した訓練に裏打ちされた隠密性。

さらに完璧を求めて習得した“気配遮断”

そして発見された場合の逃亡を確実にさせる“正と負の狂騒曲”
また、あの打ち合った際に実感した、魔術に頼らぬ戦闘能力。
間違いない一流である。それはヴィルヘルムも認めるところだ。
しかし。

2000年もの時を生き続けた盗賊にしては、その終わりは静かすぎるのだ。

「いや、考えすぎか。どんな物語も、最後はあつけないものだ」

あるいは、華やかな結末を期待しすぎた自分の未熟さを恥じる、
というところか。

「まだまだ未熟だと、そういうことか。いや、今回はいい経験になったよ、トリックスター」

彼女の亡骸を前に、ヴィルヘルムは複雑な気持ちにあった。

彼女の死というのは意外な結末であったが、怪盗トリックスターは英雄ヴィルヘルムの前に倒れた。女王の憂いは消え、エーゼルヴァイン家の名前はさらに確実となるだろう。

その一方で、まだ彼女と話をしたかったという自分がいることも否定できない事実だった。そんな気持ちを抱くこと自体が初めての彼にとって、それは不思議な感覚であったのだ。

「だが、彼女はもういない」

その決定打は、真実ヴィルヘルムが押した。魔術結界に加え、彼女に“正と負の狂騒曲”を使わせ、さらに接近戦で体力を削った。

仕方のないことだった。すぐにでも彼女を倒さなければ、警備兵の被害はさらに大きくなっていった。彼らにも家族がいる。ヴィルヘルムの判断は、決して間違っていないのだ。

「今更だ。何を言っても、か」

せめて、彼女の素顔は月の光を与えてあげたい。死してなお仮面に隠すには、もったいなさすぎる美貌であったのだから。

「恨むなら恨め。その気持ちを背負って、私は生きていこう」

それが、ヴィルヘルムにできる最大の強がり。

弔いの風は冷たく、窓の月は神秘的に輝いていた。

「失礼します」

これでは、初夜を共にする恋人のようだな、と彼は自嘲した。

鼓動が高鳴る。

体が緊張する。

息が詰まる。

汗にじむ手でようやく仮面を掴む。一息の深呼吸の後、ヴィルヘルムは静かに仮面を剥がしていく。

それが、間違いだった。

その仮面を剥がさなければ、世界の“裏”を知らずに済んだのに。名誉ある勘違いをしたまま、本当の“世界”を知らずに済んだのに。

ゆっくりと、決して顔が傷つかぬよう、大切に大切に。そこに現れた顔は、やはり彼が昼間に会った。

「彼女じゃない」

別人だった。

確かに若い女性である。その容貌も、美女と呼んで差し支えないだろう。

しかし、彼女ではない。

この盗賊は、トリックスターではない。

その事実を正しく認識した瞬間、ヴィルヘルムは電光の如き速さで振り向き、壁時計を見る。

時刻は、深夜、一時。

トリックスターが予告した期日は、すでに過ぎている。

ド、クン。

奇妙な違和感が、英雄の本能に警鐘を鳴らす。

「まさか!?!」

ヴィルヘルムは警備兵に待機を命じ、一人で地下室へ向かう。階段は細長い、人一人がやっと通れる幅である。空気は冷え、人足であれば必ず足音が響くはずだった。

「あのロビーの騒ぎに紛れて……?」

あり得ない。いかに気配を消したとて、自分に悟られずに地下室へ向かうなどできるはずがない。だが、階段の先に閉じられているはずの扉が、ヴィルヘルムの契錠魔術によって守られた堅牢な扉が、開いているではないか。

「バカな!?!」

全身の汗が止まらない。絶息しそうな絶望が、彼の心臓と思考を
圧迫する。

一步。

また一步。

ヴィルヘルムは無意識のうちに、扉の奥へと “世界の深淵”
の入口へと足を踏み入れる。

「ない……」

ない。

文字通り、あるべきはずの“星”が。

「」

言葉さえ出ない。

暑いわけでもないのに、夥しい汗が止まらない。

生唾をゴクリと飲む音が、ヴィルヘルムの耳にこびりついて離れ
ない。

悪い悪夢だ。

ヴィルヘルムは、そう思った。

だが、なればこそ。

「やっと、気付いたんだ？」

悪夢は、覚めぬからこそ、悪夢たり得る。

ヴィルヘルムは昏間に聞いた声のする方へ、半ば強制的に振り向
かされた。

「星」があるべき土台の下に横たわる、一匹の猫がいた。

「可愛い子猫ですね」

自分がそう言い、織田が抱き上げた、一匹の黒い子猫。いるはずのない、どのように彷徨っても辿り着けるはずのない地下室に、それは確かにいた。その子猫が、二本足で立ち上がる。

「さて、ここで質問。道化は、いつ頃に現れると思う？」

もう、汗さえ滲まなかった。

ヴィルヘルムは、生きながらにして全身が干涸びていく感覚を無抵抗に味わった。

この瞬間、抱えていた疑問が氷解する。そして理解する。本当の道化が誰なのかわ。

目の前で繰り広げられる、あり得ない光景にすべての答えがあった。

ゴキゴキ、と音を立て、歪に変形していく黒い子猫。

ヴィルヘルムの視線が、みるみるうちに、上がっていく。

ただ一度　ただ一度だけ挨拶したにすぎぬはずなのに、細部に至って異様なまでに記憶へと刻まれた彼女の容姿に、ヴィルヘルムは改めて心を奪われていた。

地下室の淡い光が、彼女の白い裸体を露わにする。

形の崩れぬ豊かな乳房と蜂のようにくびれた腰、そして滑らかな曲線美を描き伸びる引き締まった脚。

異性の情欲を焚き付けてやまぬ、あまりにもなまめかしい肢体で

あった。神造の女神像を思わせる、完璧な芸術品がそこにある。

「はい。お待ちせ、英雄さん」

「曰く、誰も彼女の姿を見た者がいない」

当然だ。

人間が動物に成り代わるなど、どこの誰に想像できるというのか。それはもはや変装ではなく。

整形と呼ぶことすらも生温い。

それは変身。骨格から筋肉、神経に細胞　ありとあらゆるすべてを自分の体に投影する、人外の秘技。

魔術士の領域にも止まらぬ、その存在自体が神秘のうえに立つ超越者。

ゆえに、彼女は誰からともなく、こう呼ばれる。

“怪盗トリックスター”

「君は、いったい、何者なんだ……？」

ヴィルヘルムがやっと出しえた、その問いに。

クスリ、と哀れみにも似た微笑みを浮かべて。

「あなた、バカ？　ミステリアスだからこそ、謎を楽しめるものよ？」

朱と黒のコントラストが映えるスーツに身を包み。
無慈悲に。

悪魔の降臨を祝福したのだった　。

「また、君と逢う日まで」（前書き）

これで、いちおう最後となります。世界観が特殊なので、この作品を通して少しずつ明かされていきます。

「また、君と逢う日まで」

「 いったい、どうやって……」

予想外の展開に、私は冷静な判断力を失いつつあった。

人間が猫に変身する そんなことは、たとえ魔術士であっても不可能だ。仮に人類の突然変異種が現れたとしたなら可能性として否定できないが、すでに理解の範疇を超えてしまっている現象に答えなど見つかるはずもない。

「クスクス。英雄さん、能力の説明を相手に求めちゃいけないよ。そんなに親切な人、あなたが体験した戦場にいたのかな？」

痛いところを指摘され、私は黙ることしかできない。

だが、彼女の言葉はもつともだ。自分の能力を相手に教えるバカはいない。

それは、彼女が墓まで持っていかなければならない秘匿である。もしも知られたら、その相手が彼女の手によって墓に逝かなければならない。

「 いい顔、してるよ」

その程度のことまで気が至らなかった私をバカにしたのか。

私は睨み付けるように彼女を見上げた。

「ああ、違う違う。今のはね、別にあなたをバカにしたわけじゃないのよ。」

そうね、強いて言うなら 今の力量がそのまま顔に出てるって言いたい。

思い上がり、虚勢もしない。
うん。そういう素直な心の持ち主って、すごくステキよ」

彼女に褒められ、心のどこかで嬉しがる自分が情けなかった。
女狐、と織田は言った。だが、それは私にとって遅い警告だった。
この心は、すでに彼女の虜となりつつある。

と、そこでもうやく気がついた。私が別の盗賊に気を取られている間、彼はなぜ姿を現さなかったのか。

「トリックスター……君は、織田に何かしたのか」

努めて冷静に、私は質問する。

逆に、彼女はこれまでとはうってかわって、苦々しい表情を見せた。

「ああ……オっちゃんね。

だってだって、アイツ私に会うなり、いきなり抱き殺そうとするんだもん。後で一発ぶん殴ってやないと気が済まないわよっ」

思わず見せた彼女の無邪気な仕草に、私は今まで力み過ぎていた肩の力が抜けたのを感じた。

しかし、織田が彼女を抱き殺そうとしたのはいかななものかって、そうか。

確か彼女は一度、変身した子猫の姿で私たちの前に現れている。
あの時は織田が抱き上げたが、そう言われるとあの子猫は異常なほど嫌がっていたな。

「うう、思い出したらオっちゃんの臭いが……あの汗の臭いが……」

それは、彼女にとってよほど辛い経験だったのだろう。瞳を閉じて手で額を覆い、さも熱があるかのように震えている。こう見ると、やはり彼女は外見の年頃　恐らくは18、9の少女なんだな、と場違いな思いを抱いてしまっていた。

「　君にも、苦手なものがあったんだね」

「そりゃあ、私だって人間よ？　まあ、私を追いかける“使徒”は、私のことを“魔人”って呼ぶけどね」

笑いながら、とんでもなく恐ろしいことをさらっと言つてのけたトリックスター。

彼女の言葉の意味がわからない人たちのために、ちゃんと説明をしておこう。　そもそも“魔女狩り”によって人々から隠れなければならなくなった魔術士たちは、多くのルールを独自に考案した。自分の身を守るため、間違つても人々にバレぬように。

ゆえに、魔術士たちは自分たちだけの組織を作り上げた。簡単に言えば、科学者の研究所兼養成所みたいなところか。今では全世界に拡大し、多くの魔術士たちが“魔導協会”に在籍している。

在籍していない魔術士たちも、基本的なルールは協会の“調停者”によって教育される。だが、それ以上は本人の自由意思を最優先とし、魔術を忘れて日常を過ごす者もいる。

基本的なルールは幾つかあるが、その中でもまず第一に教えられるのが“徹底した秘密主義”　不用心に魔術を使って正体を晒すな、ということだ。

仮にこのルールが破られ、世間に正体を晒し、その地域の大問題として発展した場合、協会側から派遣されるのが“執行者”である。彼らは、ルールを破った者が故意か事故かにかかわらず実力をもってこれを排除し、その地域の治安を回復する。その行動内容は概ね執行者の任意とされるが、基本的な排除は抹殺だ。

この執行者たちの中でも、精鋭中の精鋭と呼ばれる実力者たちが

“使徒”である。

その実力は協会の中でも間違いなく最強クラスであり、私の実力とほぼ同じか、あるいはそれ以上の超人性を誇っている。

つまり、使徒に追われるということは、協会側からすれば最大級の抹殺勧告である。それを涼しげな顔で、トリックスターは吐き捨てたのだ。

「ヒドいと思わない？ 私なんかどこからどう見ても、か弱い女の子なのに。魔人だの化物だの、言いたい放題よアイツら」

だが、彼女の言葉にはさらなる意味が隠されていた。

“魔人” 長い時代を生き抜いた人間が、その時の流れとともにある種の神秘性を身に纏うことで“人類”というカテゴリーから外される、世界による修正の称号。

彼女は、その魔人の一人だという。ならば、彼女は本当に2000年もの時代を生きてきた盗賊だということのか。

「君は、いったい、何者なんだ……？」

脳裏に浮かんだ疑問は、ほとんど無意識のうちに口から躍り出た。私の言葉を聞いた彼女は、ふと気付いたように。

「ああ。そういえば、私はまだ名前を言ってなかったわね」

極上の微笑みを浮かべながら。

「私の名前はクリスティヌ・ルパン。」

“超魔十二神将” 《アンノウン・ナンバーズ》の一人にして序列9

位の“快傑盗賊”よ」

静かに。

禁断の名を口にしたのだった。

“超魔十二神将” 《アンノウン・ナンバーズ》

その名を聞いた瞬間、私に髪が逆立つほどの戦慄が走った。

世界に12人しかない、最凶にして最悪の超人魔人怪物たち。

人でありながら、人の身で殺すことは不可能と言われた絶対者。

まぐれにも勝てぬ、人の域を凌駕した魔力を持つ不死の超越者。

その中の一人 序列9位に彼女、クリスティヌ・ルパンがいるという。

私は戻ってきた恐怖を全力で抑えつけ、聖剣を胸に構えたまま、彼女に問い掛ける。

「超魔十二神将……あの化物たちの仲間だということのか？」

「仲間？ ヴイルっち、面白いこと言うのね。」

あのね、超魔十二神将っていうのは単なる称号みたいなものよ。

私だって、過去に戦った相手が偶然にも序列9位の前任者だっただけで、固執してるわけじゃないし。

それにアイツらの中じゃあ、一番まともな人間のつもりよ？」

超魔十二神将なら、猫に化けることも決して不可能じゃない。死者を操る序列7位に比べれば、実に可愛らしいとさえ思える。

逆に、序列9位ならなんとか奮戦できるのではないか そんな一抹の希望さえ沸き立つ。上位3名は“魔法”を操る“魔導師”でさえも容易に手が出せない存在と言われているが、聖剣を持つ私なら、彼女を倒すことも不可能ではないように思えてくる。

「 うん？ もしかして、殺る気満々ってやつ？」

そんな私の殺気を見抜いたのか、クリスティー又は微笑みを絶やさずに言葉を繋いだ。

「 いいねいいね。心地イイよ、その殺気。うん、さすが英雄さん。

……………でもね」

空気が、一変する。

これは、決して喻えではない。

背筋を、耐えようのない悪寒が支配する。

全身から、身が凍るのではないかと思うほどに冷たい汗が、一斉に噴き出す。

今まで体感したことのない、地下室を満たす殺意の嵐に、私は蛇に睨まれた蛙のように金縛りにあって。

いつの間に移動したのか。

耳に生温かな吐息が感じられるほどに近くから、官能の中枢をくすぐる音域の囁きを最後に。

「 あなたの剣は、まだ、届かないわ」

首筋に叩き付けられた衝撃と同時に、私の意識は深い眠りへとついたのであった。気がついたのは、それから数日後の朝だった。

部下からの報告と照らし合わせた彼女の侵入経路は、恐らく以下の通りだろう。

彼女は、私が仕掛けたロビーの魔術結界に気付いていた。

それゆえに一番柔軟性の高く、そして発見されても目立ちにくい子猫の姿を選んだ。

しかし、それだけでは安全とは言えない。他にもルビーを狙う盗賊がいたからだ。

そのため彼女は、この別の盗賊を利用した、とは考えられまいか。例えば、その別の盗賊が侵入しやすい経路を予め作っておく。猫の姿で気配を消せば、人間はまず感知しにくい。ましてや暗闇に紛れたなら、警備兵を難なく始末できただろう。

そしてロビーに辿り着いた盗賊が、私の罠に引っ掛かる。それと同時に彼女は地下室へ移動。私の契錠魔術を逆探知侵入し、破壊。私と警備兵がロビーに到着したのは、盗賊が罠にかかってから一分後。つまり、彼女は私たちと盗賊を一度に足止めたのである。

華麗、大胆、ミステリアス　もはや言葉もない。

ちなみに、ルビーは私の手に握らされていた。織田も裏庭で倒れているところを発見、また彼女の後を追ったという。

トリックスター　いや、クリスティーナがなぜルビーを残したのかはわからない。しかし私が気絶した後、彼女はロビーに待機していた警備兵と鉢合わせ、辛くも逃げ延びたという。

だが、正確には違うか。恐らく彼女は、わざと警備兵たちに姿を見せたのだ。女王陛下に提出した報告書の通り、彼女は地下室で私と遭遇し、そのルビーを盗むことができずに警備兵に見つかって混戦。あわや逃亡　それが、彼女が残した筋書きなのだろう。

「クリスティーナ・ルパン……」

屋敷の窓から見える青空へ、想い人の名を密かに口にす。

もっと彼女と話したい。

もっと彼女を知りたい。彼女の髪がなびく紅い夜から。

私はトリックスターに初めて苦汁を舐めさせた英雄として、さらにエーゼルヴァイン家の地位を固めている。

もはや、女王の信頼は揺るぎないほどだ。

「今度は、私が君に会いに行こう」

しかし、私の心は別にあつた。
私の心を盗んだ、怪盗の存在。

「私が、君に相応しい男となる」

それから300年後の未来、私たちは再び対面することになるのだが、それはまた、別の話である。　ヴィルヘルムに手刀を叩き付け、私は胸元から“星”を取り出す。

アン女王の至宝　　“プリンセス・ルビー・オブ・ザ・スター”

地球が長い時をかけて生み出した、奇跡の宝石。

しかしこれには、膨大な魔力が込められている。

その貯蔵量はAクラス。実にマスタークラスの魔術士が持つ魔力量に匹敵する。

一般の魔術士にしては、喉から手が出るほど欲しい代物だ。

もちろん、私も例外じゃない。

“彼”との決戦時には、使い捨ての魔術器になるはず　　だった。

「　最初に見た時は、完璧だと思ったんだけどね」

触れてみて、初めて気付いた。

この宝石は、魔力を貯めることはできても、放出することができないのだ。

つまり、使い捨ての道具にもならない、できそこない。

ただ、内に込められた魔力を、術者が取り込むだけの道具。

「魔力回復専用の魔術器　　ンなもんいらないつつ」

まったく、何のためにここにきたんだか。道化どころか、笑い話にもなりやしない。

悔しいのでそのまま持って帰ろうとしたけど、隠れ家にはB級グッズがどんどん溜まっていることに気付いた。

「……………うん。ヴィルっちに話し相手になってもらって、ちょっとはスッキリしたし。」

まあ、返してあげてもいいか」

なんて優しい私。

気絶したヴィルっちの手にルビーを握らせ、どうせならヴィルっちが手柄になるような逃げ方を考えてみる。

「警備兵のみんなと遊んでから、ちょっとだけロビーを壊して……………ああ、でも、そうなるヴィルっちが困っちゃうのかな?」

やるからには完璧に。

きつと私、いい奥さんになるかも。

意外と尽くしちゃうタイプだしね〜。

なんて言っていると、悪い男にコロっと騙されたりして。

「……………つつつか、もう騙されてるんだけどさ」

よし、計画は出来上がり。

それじゃあ華麗に大胆に始めましょう。

「こんなサービス、二度とないんだからね」

そうして地下室を出る。

ロビーにはきつと、何百という警備兵がいるだろう。

彼らを傷つけずに遊んであげて、さようなら。

「じゃあね、英雄さん」

そうして、私の人生初めての失敗の日。

けれど気にすることもなく、私は博物館を後にした。

自分で言うのもなんだけど、私は世界で一番の盗賊だ。

どんなものでも華麗に大胆に、そして完璧に盗んであげる。

繊細に試行錯誤する計画を立てて、世界が驚くミスティアスな演出を欠かさない。

私は計画を練るたびに、まだ見ぬ宝物に恋をする。

そんな私が、あるモノを盗まれた。

事前に築き上げた計画は見事に木っ端微塵。

ぐうの音も出ないほど、私はあっさりと敗北した。

あれは、古の聖人が死んだ、運命の日。

彼の聖遺物を盗もうとした、星降る夜。

そこに“彼”がいた。

いつも通り邪魔者を排除しようとした私を、まるで意に介さずに片手だけで一蹴した、圧倒的すぎる実力差。

けれど、あの表情は、今でも覚えている。

笑っているような。

泣いているような。

彼の心で凄まじい慟哭が暴れているのが、わかった。

まるで、見ているこっちが痛くなる、その表情。

まるで、見ているこっちが辛くなる、その表情。

もう見たくない。

私は、逃げなければ殺される状況にありながら、そう思った。彼が、あんなにも寂しげにしている表情を。

その紅い瞳は、私に一瞥もなく、横を通り過ぎていく。

その日から、私は決意した。

「盗られたモノを、盗り返してやる」

彼を倒すために。

彼の心を盗むために。

だから私は、今日も元気に盗賊稼業を続けている。いつの日か、彼を倒す実力を、つけるまで。

“超魔十二神将” 序列1位にして“世界最強” の存在。

「まだまだ先は長そうだよ、“魔王”さん」

「……ぬうう。どこに行きおつた、女狐め」

眼下でキョロキョロ辺りを見回すオッチャンを眺めながら、私は今日も次の恋人に会いに行くのだった。

くまた、君と逢う日までく（後書き）

ご愛読、ありがとうございます。いかがでしたでしょうか？これを機に、また私の作品を見ていただけると嬉しいです。それでは、また次回の作品でお逢いしましょう！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8383c/>

星空と銃弾と紅い夜

2008年8月29日19時23分発行